

## 東北抗日聯軍第一路軍の指導者楊靖宇

神 戸 輝 夫\*

【要 旨】 楊靖宇は、1905年河南省確山県の李家湾に生まれた。彼の青年時代は国民大革命時期に当たる。1927年4月国民大革命を担ってきた「国共合作」は破綻し、国共内戦へと進んだ。楊靖宇は1929年初め中国共産党の指示により東北地方に入り、以後1940年2月戦死するまで東北地方南部（南満）において東北抗日聯軍第一路軍を率いて日本帝国主義の侵略に抵抗した。本稿は、「南満」における楊靖宇の活動を明らかにするものである。

【キーワード】 楊靖宇 東北人民革命軍 東北抗日聯軍 満州

### はじめに

2001年9月18日は、「九・一八」（瀋陽）勃発70周年に当たった。この日中国瀋陽市では、「九・一八歴史博物館」前の広場で「遼寧省暨瀋陽市社会各界」主催による「勿忘“九一八”大会」（「九一八」を忘るゝ勿れ）が開催された。また前日17日には、中国日本友好協会・日本中国友好協会主催による「“九・一八”事変七十周年記念講演会」が「以史為鑑 面向未来」（歴史を以て鑑とし、未来に向かう）のスローガンを掲げて瀋陽市鳳凰飯店で開催された。

私は、日中友好協会大分支部訪中団の一員として、この二つの行事に参加した。また瀋陽市では、遼寧省檔案館と“九・一八”歴史博物館を、撫順市では撫順戦犯管理所、平頂山遺骨館を見学した。いずれの見学においても、日本帝国主義による中国東北地方への激しい侵略の爪痕と向き合うことになった。その中で一際私の心に深く焼き付いたのは、遼寧省檔案館と“九・一八”歴史博物館に展示してあった楊靖宇に関するものであった。楊靖宇は後に触れるように、日本の東北地方への侵略に対して東北抗日聯軍第一路軍の軍長として闘い、最後は壮烈な戦死を遂げた人物である。私たち大分県日中友好協会一行は、瀋陽市での記念行事が終了すると集安に向かった。その途中通化市で図らずも「楊靖宇烈士陵园」を訪れ、献花することがで



「九・一八事変七十周年記念講演会」

平成14年5月7日受理

\* かんべ・てるお 大分大学教育福祉科学部歴史学教室

きた。また通化から集安に旅した道は、楊靖宇の戦いの場でもあった。

このような経緯があり、私は、楊靖宇についてその事績を明らかにしたいと考えた。折しも2001年春から「教科書問題」が起こり、アジア各地から「新しい歴史教科書をつくる会」の中学校歴史教科書に対する厳しい批判が相次いだ。中国の中学校歴史教科書では、楊靖宇についても記述しており、日中戦争に関する両国の記述内容に大きな差がある。

本稿は、日本の教科書が触れることの少ない中国の抗日運動について、その空白を埋めることも視野に入れ執筆したものである。



「九・一八」記念館前での集会

## I 楊靖宇の生い立ち

楊靖宇は、1905年河南省確山県李家湾に生まれた。本名は馬尚徳、又は馬順清、号潤生、字驥生。妹が一人いる。楊靖宇5才のときに父が死亡し、母親は二人の子を連れて、夫の弟の下に身を寄せた。楊靖宇は7才で私塾に入り、1919年、14才で確山第二高等小学校に入学した。この年は中国現代史上で特筆すべき「五・四」運動が起こり、楊靖宇も反帝国主義、日貨排斥運動に参加した。1923年夏、開封にあった河南省立第一甲種工業学校に入った。この学校は封建的色彩の強いものであったが、楊靖宇は『響導』『新青年』などの雑誌を読み、1926年「中国共産主義青年団」に入団した。1926年10月北伐勢力が武漢を占領すると、工業学校は夏休みを繰り上げて休講となり、楊靖宇は確山県に帰省した。1927年4月確山県の貧農約一万人が蜂起し確山県城を包囲したとき楊靖宇も大刀をもって参加した。同年6月中国共産党に入党。確山県農民協会会長となり、劉店の秋收蜂起を指導し確山農民革命軍を創建し、総指揮の任に就いた。1928年中共豫南特委書記となり、開封、洛陽などの地で秘密革命工作に従事し、この間三度逮捕されている。

1929年秋、楊靖宇は党の指示により名を「張貫一」と変名して東北に行き、中共撫順特別支部書記に任じられ、労働運動を指導した。当時撫順炭鉱を管理していた日本軍部は張貫一即楊靖宇を逮捕したが、かれは完全黙秘を通した。日本軍部は彼を中国法院に引き渡さざるを得ず、結局中国法院は「破壊国際団結」の罪名で一年半の懲役刑に当てた。1930年末に釈放された。1931年9月18日満州事変が起きると、楊靖宇は満州反日救国会総会長に押され、中共ハルビン市委書記兼代満州省委軍委書記に任じられ東北地方の抗日闘争を指導することとなった。<sup>1)</sup> これ以後の楊靖宇の活動については、以下に述べる。

## II 中国の初級中学教科書『中国歴史』に記述されている楊靖宇

ここでは「国家教育委員会中学・小学教材審査委員会の審査を経た試用本・九年義務教育三年制初級中学教科書・人民教育出版社歴史室編著『中国歴史』第4冊（人民教育出版社出版1995年4月第2版、1996

年10月版西第2次印刷)」に記述された楊靖宇の事項について紹介する。<sup>2)</sup>

#### ①第5課 日本が中国を侵略した“九・一八”事変

##### 全国抗日救亡運動の発生

“九・一八”事変後、全国人民は蒋介石の不抵抗政策に反対し、政府に内戦を停止して日本の侵略に抵抗するよう要求した。抗日救亡運動は急速に盛り上がった。

東北人民とまだ撤退していなかった東北部隊は、自発的に抗日義勇軍を組織して、日本軍の侵略に抵抗した。その中の有名な一隊は、愛国的将帥の馬占山に率いられていた。中国共産党は党員の楊靖宇、趙一曼（中国共産党が東北に派遣して抗日遊撃闘争を組織させた女性共産党員。東北抗日連合軍第三軍で国の政治委員に就任した。1935年11月、彼女は敵と交戦中、負傷して逮捕されたが、獄中、固く節を守って屈しなかった。翌年、彼女は看守の協力のもとに脱獄したが、後また逮捕され、殺害された）らを派遣して、東北で遊撃隊を組織し、抗日遊撃戦争を展開した。

#### ②第8課 “敵の後方へ行こう”

##### 敵の背後の戦場

中国共産党の指導下で、東北の各抗日隊伍は統一した東北抗日連合軍を組織し、楊靖宇、李兆麟などがそれぞれ指揮した。1937年の初め、東北抗日連合軍は4万余人に発展し、東北の多くの地方を統制していた。彼らは極めて困難な環境の中で英雄的に日本侵略軍（カラーグラビア第13図を見よ）を攻撃し、無数の感動的な事跡を作り出した。（中略）

楊靖宇（1905-1940）は、河南確山の人である。1940年初頭、彼は十数名の兵士を率いて吉林蒙江県の県境に来て、“包圍討伐”の日本軍と遊撃戦を展開した。叛徒の裏切りによって、彼らは日本軍に幾重にも包圍された。最後に、楊靖宇は単身で数百名の敵と数昼夜わたりあい、壮烈な最後を遂げた。残虐な敵は彼の遺体を解剖し、彼の胃の中に一粒の穀物さえなく、木の皮、草の根、綿の実しかないことを発見した。人民はこの民族の英雄を記念するために、蒙江県を靖宇県と改名した。

### Ⅲ 南満州における楊靖宇の活動

#### 1. 磐石県・海龍県における抗日遊撃隊の整頓<sup>3)</sup>

1932年1月の統計によると中共満州省委所属の党員は2132人で、主要な組織は瀋陽、ハルビン、大連の大都市と中東鉄道、南満鉄道沿線の小都市、農村部では東満、磐石、珠河、湯原、寧安、饒河などにあった。このころ中共満州省委はその組織をハルビンに移し、東北各地の党組織に優秀な幹部を派遣して抗日活動を強化する方針を採った。

南満地区において最も早く建立された遊撃隊は、磐石県遊撃隊であった。磐石県では、1930年8月中共磐石県委が成立、翌年8月には中共磐石中心県委が成立し、その下に磐東、磐北、磐石西区委、伊通、双陽特支、樺甸支部を形成していた。1932年2月から4月にかけて大規模な反日闘争が激化し、磐石「二・九」「四・三」闘争が行われた。これらの闘争を指導したのは、李東光（李祖俊・朝鮮族 1904-1937）、李紅光（李弘海・朝鮮族 1910-1935）らの朝鮮族の中共党員であった。

一方、中共満州省委は1932年1月、吉林市特支書記張国振（張珩）、元中共北満特委楊君武（楊佐）を磐石に派遣した。1932年6月、張国振らは磐石三道崗小金廠に抗日部隊を成立させた。

この部隊は対外的には満州工農反日義勇軍第一軍第四連隊を称し、対内的には磐石工農反日義勇隊(磐石義勇隊)を名乗った。隊員は30余人から50余人に増え、隊内に党支部が作られた。しかし党の政治方針としては、王明の「左」路線をとり、「土豪を倒して田地を分ける」政策を行ったため中小地主の利益を侵害し、地主の反撃を受け、1932年8月9日、同8月16日に郭家店で大敗北を喫した。8月下旬張国振は省委に赴き工作状況を報告し、指示を仰いだ。

この間磐石中心县委は、磐石義勇軍と抗日軍の一つ「常占隊」との合併を決定し、磐石義勇軍の呼称を常占隊に統一することにした。<sup>4)</sup> 10月2日張国振がハルビンから帰り、省委が磐石中心县委に出した新しい指示を伝えた。その内容は、政治路線は、「土地革命の実行」であり、磐石義勇軍を中国工農紅軍第32軍東北遊撃隊と改名することであった。10月9日磐石中心县委は「党団連席会議」を開催し、磐石義勇軍の常占隊からの離脱を決定し、樺甸県一帯で遊撃活動を継続した。10月23日樺甸蜜蜂頂子において分隊党小組代表会議が開催され、他の抗日遊撃隊との衝突回避のために遊撃隊は対外的に「五洋」を称することとし、遊撃隊を改編することを決定した。問題は遊撃隊の活動地域を磐石県とするか、東満に進むかに分かれたことである。11月4日この問題を討議するため党幹事会が開催され、張国振の政治委員の剥奪、満漢生を新政治委員とする、暫くは樺甸を臨時根拠地とし、上級の指示があるまでは磐石にも東満にも入らないことを決定した。<sup>5)</sup>

磐石、海龍の党組織と遊撃隊の整頓を目的として満州省委から派遣されたのが、省委候補委員・省委軍委代理書記楊靖宇である。楊靖宇は商人に変装し常占隊に入ったが、南満遊撃隊は既に常占隊から離脱した後であった。11月彼は樺甸蜜蜂頂子に至り、党支部拡大会議を開催し①南満抗日遊撃戦の形勢分析、②遊撃隊拡大方針、③磐石遊撃根拠地の形成等について報告した。同会議では、省委の決定を受けて「五洋」を廃止し、新たに「中国紅軍第32南満遊撃隊」とすることを決定した。この後楊靖宇は海龍に移動したが、1933年1月第32南満遊撃隊は反動地主張博卿らの襲撃を受け、総隊長孟杰民が殺害され、後任総隊長王兆蘭、政委初向臣も殺害された。省委は、省委巡視員劉過風を派遣するとともに楊靖宇を磐石に呼び戻した。楊靖宇は、同年春節前後に反動地主とその背後にいた日本軍を攻撃し戦果をあげるとともに、省委の意向を受けて南満遊撃隊の指導体制の確立に務めた。その結果楊靖宇は南満遊撃隊の政委に任命され、代理総隊長には袁德勝が就いた。総隊は3隊から成り、第1大隊長朴翰宗、政委嚴弼順、第2大隊長韓浩、政委朴四平、第3大隊長王某、政委王紹文の陣容とした。また新たに教導隊が結成され、隊長李明海、政委李紅光が任命された。南満遊撃隊は玻璃何套を根拠地とし、樺甸、伊通、双陽に遊撃区を拡大した。

1933年1月から4月にかけて、日本軍は南満遊撃隊の根拠地に四次にわたる「囲剿」を行ったが、楊靖宇はこの五カ月間に大小戦闘60余を闘い「囲剿」を粉碎し、遊撃隊員を250余人に拡大した。当時南満遊撃隊の他に抗日武装勢力として義勇軍、山林隊、紅槍隊、大刀会等があったが、相互に連絡はなく各々独自の方針をもって活動していた。磐石には趙宝林を首とする「趙旅」、馬立三を首とする「馬団」があった。楊靖宇は彼らとの関係改善を行い、共同して抗日する体制を確立した。南満州地区にあったもう一つの抗日武装勢力は海龍遊撃隊であった。中共海龍县委は民衆自衛軍第九路軍に工作を進め、密かに工農義勇軍を組織させた。しかし1932年末、民衆自衛軍第九路軍は日本軍の攻撃により瓦解したため、工農義勇軍は第九路軍から離脱した。楊靖宇は1933年1月、磐石から海龍に入り、工農義勇軍を中国紅軍第37軍海龍遊撃隊に再編成した。<sup>6)</sup> 海龍遊撃隊の活動地域は清原、海龍、山城鎮一帯であった。後に海龍遊

撃隊は楊靖宇の率いる中国紅軍第32軍南滿遊撃隊と合流する。

## 2. 東北人民革命軍第一軍獨立師の結成

1933年1月17日中華ソビエト臨時中央政府、工農紅軍革命軍事委員会は「為反対日本帝国主义侵入華北願三条件下与全国各軍隊共同抗日宣言」(「一・一七宣言」)を發表、次いで1月26日中共中央名義による「給滿洲各級党部及全体黨員的信」(「一・二六指示信」)を出した。<sup>7)</sup>「一・二六指示信」は、東北地方における反日民族統一戦線結成の方針を打ち出したものである。

1933年初め、滿州省委は南滿遊撃隊を一つの獨立師とするよう磐石中心県委と南滿遊撃隊に提議した。同年春、「一・二六指示信」は滿州省委に伝達された。これを受けて同5月15日滿州省委は、省委拡大會議において「關於執行反帝統一戦線与争取無産階級領導權的決議」を決定し、楊靖宇を呼び南滿州における「一・二六指示信」の具体化について検討した。5月31日楊靖宇は「楊靖宇同志給滿州省委的報告」を提出した。

同7月1日滿州省委は、楊靖宇との検討に基づき「中共滿州省委給磐石中心県委及南滿赤色遊撃隊的信」を作成し、①党の指導する反日遊撃隊を東北人民革命軍第一軍に改編すること、反日統一戦線の軍事を指導するために抗日連合軍司令部を作ること、遊撃戦術を駆使し硬直した戦術を取らないこと、遊撃運動を拡大し抗日根拠地を作ること、②民衆の反日闘争を組織指導し、民衆を武装させ、民衆の反日根拠地を作ること、③党の組織を發展させ、南滿中心県委を結成し、磐石、海龍等の地区の工作を統一的に指導することを任務として定めた。

楊靖宇は部隊に戻ると新しい方針の具体化、即ち抗日連合軍司令部の結成に取り組んだ。7月楊靖宇は盤石北部の「毛団」「馬団」「趙旅」「韓団」「三江好」「殿臣」「四季好」「常占」「許団」などの抗日義勇軍と山林隊の指導者たちを呼び集め、「毛団」の毛作賓を首領、楊靖宇を政治委員長、李紅光を參謀長とする「連合參謀處」を結成した。「連合參謀處」に結集した部隊は約3000人を数えた。9月18日中共盤石中心県委と南滿遊撃總隊部は西玻璃河套において合同會議を開催し、紅軍第32軍南滿遊撃隊を東北人民革命軍第一軍獨立師とすることを決定した。<sup>8)</sup>

同師団には政治部、參謀處、軍事處、軍医處、政治保安連より成る師司令部が置かれ、楊靖宇は師長兼政治委員、李紅光は參謀長、宋鉄岩が政治部主任となった。また獨立師第一団の団長袁得勝、政治委朴翰宗、參謀長李松波、第三団の団長韓浩、政治委曹国安を決めた。10月27日楊靖宇は獨立師司令部、政治部保安連、第三団を率いて黒石鎮付近から輝発江を渡河して南下し、紅軍第37軍海龍遊撃隊と蘇劍飛の率いる南滿遊撃隊の合同會議を行わせ、獨立師政治部主任宋鉄岩を南滿遊撃隊政治委員とし、海龍遊撃隊を江南遊撃第一聯に改称し柳河一帯で活動を継続させた。

楊靖宇の指導の下に獨立師司令部は、抗日武装を發展させ遊撃区を拡大したが、主力から離れた後衛部隊は、傀儡軍混成第六旅獨立第三營々長邵本良の率いる第八聯の急襲を受け中共滿州省委常委金伯陽らが殺害された。楊靖宇は200余人を率い、敵の軍事拠点金川縣凉水河子(現柳河縣に属す)を攻撃すると見せかけ、柳河縣三源浦鎮を襲撃し11月24日同鎮を占領、鉄路工程局、警察署、兵營を破壊し、通化駐在日本領事館總稽察を殺害した。邵本良が三源浦鎮を救援したとき楊靖宇は既に十分な装備を得て撤退していた。邵本良は混成第六旅々長廖弼辰に宛てた通信をわざと楊靖宇の手元に落ちるように工作し、楊靖宇をおびき出そうとした。楊靖宇はこれを察知し、逆に獨立師第一団を呼び寄せる通信を邵本良の下に落ちるように工作した。邵本良はこの通信を本物と信じ、軍を率いて凉水河子を出発した。この情報を得た楊靖宇は、12月23日獨立師第三団、抗日義勇軍「老常青部」を率い凉水河子を攻撃し、20人を斃し、

10人を捕虜とし、大量の軍需物資を奪った。このとき楊靖宇は、独立師第三団と濛江から来た南満遊撃隊を率い、抗日義勇軍と連合して八道溝（輝南に對）に勢力を張った。12月日本軍は2000名の兵力を動員して独立師第一団を攻撃した。1934年1月独立師第一団、義勇軍「天虎」「馬団」は輝發江を渡り、独立師司令部、独立師第三団、南満遊撃隊と合流し、東北人民革命軍第一軍独立師は、楊靖宇の指導の下に南満州一帯の抗日武装勢力の中心となった。

### 3. 東北人民革命軍第一軍の結成

1934年2月21日独立師司令部は濛江県城牆砬子において抗日義勇軍代表大会を開催した。同大会は「東北抗日聯合軍闘争綱領」を決定、抗日聯合軍総指揮部を結成し、総指揮部の責任起草による「抗日聯合軍宣言」を決議した。また総指揮楊靖宇、副総指揮隋長青（のど嚙）、参謀長李紅光、政治部主任宋鉄岩、参謀委員各部首領を決定し、江南各部義勇軍八支隊を定めた。<sup>9)</sup>

輝發江南の遊撃区は、輝南、金川、柳河、濛江、通化、臨江の六県に拡大し、抗日武装勢力は約一万人となり、恒常的に独立師の周囲にあって作戦を行う抗日義勇軍は約五千人であった。楊靖宇は司令部直属の部隊を率いて河里（哈泥河）を中心とする金川、柳河、臨江県境で日本軍の「第一期討伐」と対峙した。

1933年9月東北人民革命軍第一軍独立師の成立以来、独立師は楊靖宇の指導の下に旧遊撃区を維持しつつ、新たに新遊撃区を拡大し、1934年8月には兵力700余、その活動区域は輝發江南北兩岸の10余県に拡大した。

1934年6月16日中共満州省委は「東北人民革命軍及赤色遊撃隊政治工作暫行条例（草案）」を制定した。この「条例」は、東北人民革命軍は東北民衆抗日反満武装組織であり、東北各民族の抗日反満連合の一形態、同時に工農連合の一形式であると規定していた。また同10月20日満州省委は、同年秋の日本軍と傀儡軍による「大討伐」に対抗するため、「中共満州省委為粉碎冬季大討伐給全党同志的信」を出し、同時に独立師司令部の輝發江南への移転を指示した。中共満州省委代表楊靖宇は、中共南満特委の建設と東北人民革命軍第一軍の改編を目標として同11月5日臨江県四道二岔において南満党第一次代表大会を開催し、「關於目前世界、中国、満州の形勢」を報告した。<sup>10)</sup> 同大会は正式に東北人民革命軍第一軍の成立、中共臨時南満特委の組織を決議した。東北人民革命軍第一軍は、軍長兼政治委員楊靖宇、参謀長朴宗翰、政治部主任宋鉄岩、第一師長兼政委李紅光、同副長韓浩、同政治部主任程斌、第二師長兼政委曹国安、同政治部主任張雲志、同参謀長李松波を決定し、別に保衛隊、教導隊二連、南満遊撃大隊、南満遊撃第二連を組織し、軍司令部の直属とした。中共臨時南満特別委員会は、常委・代理書記兼宣伝担当李東光、常委・組織担当紀儒林、臨時特別委員宋鉄岩ら五名を委員とし、翌1935年2月19日中共満州省委は、楊靖宇を特別常委とした。

1934年末から翌1935年7月にかけて東北人民革命軍第一軍第一師は龍崗山脈一帯を後方根拠地として通化、臨江、柳河、恒仁で活動、第二師は輝發江南一帯の濛江、金川、撫松を後方根拠地として磐石南部、西安、海龍、伊通、東豊、永吉、樺甸で活動し、日本軍、国民党軍と激しい戦闘を行った。楊靖宇は軍直属部隊と第一師の一部を率い、臨江、通化一帯で活動し、獲得した馬匹で騎兵隊を組織している。

#### IV 東北抗日聯軍第一軍の結成

1935年2月中共上海中央局が破壊され、中共満州省委と中共中央との連絡が途絶えた。中共東北党組織と抗日遊撃運動は、中共駐コミンテルン代表団から指導を受けるようになった。コミンテルン代表団は、中共満州省委を取り消し、南満、東満、吉東、松江（牘）とハルビン特委の結成を指導するなど混乱を招いた。

しかし1936年2月10日コミンテルン代表団は「八・一宣言」に基づき、紅軍、東北人民革命軍、各地の反日義勇軍をもって全国統一の抗日聯軍を結成する「為建立全東北抗日聯軍總司令部決議草案」を決定した。即ち全ての東北抗日軍隊の名称を東北抗日聯軍とすることにしたのである。これを受けて2月20日楊靖宇は、王德泰、趙尚志、李延祿、周保中、謝文東、湯原遊撃隊、海龍遊撃隊の名義による「東北抗日聯軍統一軍隊建制宣言」を発表した。この宣言に基づいて東北人民革命軍第一軍は東北抗日聯軍第一軍に改編された。軍長兼政委楊靖宇、政治部主任宋鉄岩、参謀長安光勳。軍部は教導団と三師より構成され、兵員約3000名で、第一師々長兼政委程斌、政治部主任胡国臣、第二師々長兼政委曹国安、参謀長李希敏、第三師々長王仁齋、政委周建華、参謀長楊俊恒、政治部主任柳万熙。また東北人民革命軍第二軍は、三師より成る東北抗日聯軍第二軍に改編された。

同6月東北抗日聯軍第二軍政委魏拯民は楊靖宇と会見し、同7月金川県河里的の後方根拠地会家溝において南満党第二次代表大会（裡鐵）を開催し、東北抗日聯軍第一軍、同第二軍を合併し東北抗日聯軍第一路軍を結成することを決定した。抗日聯軍第一路軍は第一軍三師、第二軍三師より構成され、第一路軍總司令楊靖宇、同副總司令王德泰、政治部主任魏拯民とした。また同会議は、南満党組織を併合して中共南満省委を結成し、魏拯民を省委書記、楊靖宇、王德泰ら13人を委員に選出した。ここに中共南満省委と抗日聯軍第一路軍總司令部の統一的指導により東南満州における抗日遊撃戦を新しい段階に押し上げるようになった。

このとき中国工農紅軍の北上抗日という全国的な抗日運動の高潮に支えられ、楊靖宇は遼寧西部に進出し紅軍の東征抗日に呼応するため第一師を主力とする軍を興京、本溪から送り出した。西征軍は6月28日出発したが、7月15日摩天嶺の戦闘で師参謀長李敏煥が戦死するなど隊員の減と疲労の蓄積により西征を中止し、本溪県の遊撃区に引き返した。楊靖宇が西征部隊の帰還を迎え、その壮挙を讃えて書いたのが「西征勝利歌」である。<sup>10)</sup>

河里会議の後、8月から10月にかけて楊靖宇は、軍部教導団を率い通化の四道溝大拐湾子、輯安の台上、花甸子、寛甸の大荒溝、錯草溝で各地義勇軍と共同して日本軍、傀儡軍に大きな打撃を与えた。日本軍は、抗日聯軍の攻勢に体制の立て直しを迫られ、同10月「三年治安肅正計画」を立て、通化、輯安、臨江、長白、撫松、濛江、輝南、金川、柳河の9県を対象とする「満軍独立大討伐」を実施することにし、通化に討伐指導部を設置した。

楊靖宇は「反討伐」闘争を継続するとともに、同11月恒仁県外三堡で「第三師指導幹部会議」を開催し、第二次西征計画の実行を提議した。第一次西征の経験から、隊長王仁齋、政委周建華、参謀長楊俊恒とし、第二次西征の主力を騎兵隊に変え、11月下旬に興京を出発して一カ月で遼河東岸に達する計画を立てた。しかしこの冬は天候異変で遼河は凍結せず渡河は不能であり、強行軍による人馬の疲労も重なり西征は再び失敗した。楊靖宇は、日本軍の「大討伐」を避けるため本溪、興京、金川、恒仁、寛甸地域の深山密林の中で冬季を過ごしたが、1937年2月11日本溪県和尚帽子の秘密宿営地が襲われ、楊靖宇の片腕であった第一軍政治部主任宋鉄岩

が戦死し、各地の義勇軍も打撃を受けた。同6月15日楊靖宇は、寛甸県境で「党委拡大会議」を開催し、党工作、群衆工作、統一戦線政策、戦闘政策、聯軍の思想工作など、多面的な観点から活動の総括を行い、1937年冬の「大討伐」に備えるとともに、抗日闘争の継続を誓った。

## V 日中戦争の勃発と抗日聯軍第一軍

### 1. 抗日聯軍第一路軍第一軍の動き

1937年7月7日蘆溝橋における日中両軍の衝突から日中全面戦争に突入した。抗日聯軍第一路軍総司令部は「為響應中日大戦告東北同胞書」(7月25日)、「東北抗日聯軍第一路軍総司令部布告」(8月20日)を相次いで出し、また中共吉東省委は東北抗日救国会の名義で「関干抗日救国宣伝運動の緊急通知」を公にし、日本の中国侵略に対して全面的に戦うことを明らかにした。

楊靖宇は日中戦争の勃発とともに活動を強化し、7月軍直属部隊150人余を率い奉天・吉林鉄道線を襲撃すると見せかけ興京県永陵衛で日本軍松本部隊と戦い、興京、桓仁、寛甸、本溪を転戦し政治的影響を拡大した。しかしこの戦いの中で中共満州省委組織部長李東光が戦死した。10月31日の寛甸県双山子と四平街の戦いにおいて、楊靖宇は軍直属部隊と第一軍一師を率い日本軍水出大隊長、陸島小隊長以下30余人を撃破し、その後西北に移動し、年末には本溪、寛甸、桓仁で活動した。

日本軍は1937年冬の「大討伐」を計画するに当たって、楊靖宇の抗日聯軍第一路軍の围剿を目標とし、「帰順者」(叛者)、特務、憲兵を積極的に動員した。特に「長島工作班」憲兵組織は、抗日聯軍部隊と東南満州地下党組織を攻撃目標としていた。また1938年以後、日本は戦争の長期化に備え、侵略戦争遂行の基地として満州の安定的確保を企図し、中国共産党影響下の遊撃区や解放区への攻撃を強化する方針を打ち出した。その政策は、①満州地区への兵力増強(1937年7月の4個師団から1938年7月の8個師団)、②兵力、財力、物力を集中した「全満掃討」「区域討伐」の実施、③都市部における共産党員の「大検挙」、④遊撃区などへの経済封鎖、⑤思想戦、宣伝戦を強化し、宣撫班による政治的投降(帰順)勧誘などであった。

日本軍の新方針により兵員を失いつつあった楊靖宇は、南満省委書記・第二軍政治委員魏拯民と会談し、1938年5月11日輯安老嶺山区において中共南満省委を開催した(老嶺議)。同会議には、楊靖宇、魏拯民、楊俊臣、韓仁和、黄海峰、徐哲、呂伯岐、伊俊山、宋茂璇ら10余人が参加し、楊靖宇は八路軍との連携、東北各地区の抗日聯軍部隊との共同作戦について提議し、抗日聯軍第一路軍第一軍と第二軍の合同と再度の西征、魏拯民を抗日聯軍第一路軍副総司令(王德泰の後任)とすることなどを決定した。

同年6月から7月にかけて抗日聯軍第一路軍第一軍は、輯安における有名な戦闘となった蚊子溝の戦闘と土口子の戦闘に勝利した。前者は、日本軍が熱河より調集した「満州剿匪の花」と称された輯安討伐隊旅長索景清の軍を破った戦闘である。後者は、日本軍をして「通(化)・輯(安)線建設史上、血で染められた最も悲惨な日」と称させたトンネル工事現場の戦闘で、日本は22万元の損害を喫した。<sup>12)</sup> 又この間、元東亜土木株式会社の労働者福間一男が、6月抗日聯軍第一軍に志願した。彼は1940年11月東寧県二道溝の戦闘で戦死するまで第一路軍総司令部直属部隊の機関銃隊の一員として活動した。<sup>13)</sup> 楊靖宇にとって痛手となったのは、同年2月に日本軍の捕虜となった第一軍参謀長安光助が転向し、憲兵長島工作班の一員として第一軍に対する「帰順工作」を行い、6月29日第一軍一師長程斌が「投降書」を受けて寝返ったことで

ある。この事件により、第一路軍の機密が洩れ、第一軍一師は瓦解した。又この後程斌は日本軍討伐隊の手先として動き、楊靖宇を討伐する先頭に立つことになるのは、次章の「楊靖宇討伐座談会」において見られる通りである。

楊靖宇は体制の立て直しを図るため、7月中旬「第二次老嶺會議」を招集し、抗日聯軍第一路軍第一軍、第二軍を取り消し、三方面軍と警衛旅に再編成し、第一路軍総司令部の下に指導を統一することにした。第一方面軍は、旧第一軍二師を改編して1938年8月成立、兵員約250人、指揮曹亞范、政治部主任伊俊山、參謀長尹、輯安、臨江、通化、金川、輝南、濛江で活動。第二方面軍は、旧第二軍六師を改編して1938年11月成立、兵員約350人、指揮金日成、政治部主任呂伯岐、參謀長林水山、長白、撫松、濛江、和竜、延吉、琿春、汪清で活動。第三方面軍は、旧第二軍四、六師を改編して1939年9月成立、兵員約300人、指揮陳翰章、副指揮侯国忠、參謀長朴徳范、延吉、汪清、琿春、敦化等で活動。楊靖宇は、抗日聯軍第一路軍総司令部警衛旅と元第一軍二師の一部、兵員約450人を率いて輯安、金川河里山区、樺甸、濛江山林地帯で活動した。9月から11月にかけて楊靖宇は日本軍の包圍攻撃を受け、一時は包圍網は50メートルまで接近したがこれを突破した。1939年春節から5月にかけて樺甸、敦化、濛江で激戦を展開し、6月樺甸県老金廠で脚部に負傷したが、9月には戦列に復帰している。

## 2. 楊靖宇の最期

日本軍は、1939年10月から1941年3月にかけて「東辺道治安肅正計画」を実行するため「聯合討伐司令部」を設置した。司令官に関東軍第669部隊長野副昌徳少将を当て、間島、吉林、通化三省より関東軍第890、590、356部隊を派遣し、警察、特務、憲兵等を加え総勢75000人を動員し、間島、通化省全部、吉林省の蛟河、敦化、樺甸、盤石、牡丹江省の寧安などを対象区域とした。また日本軍は、「軍・警一体」「陸空呼応」体制をとり、討伐隊、出撃隊、挺身隊、遊撃隊、特捜班を結成した。楊靖宇を捕らえるため、日本軍は特別に「富森工作隊」「程斌挺身隊」「唐振東挺身隊」「崔胃峰挺身隊」「地方工作班」を設置し、「特殊工作班」「宣撫班」による「帰順工作」の実施を行い、村落に対しては、楊靖宇勢力の排除を行うため村民の集団化(艱難設置)を行い、更にこの部落を20~30名の警察官を駐留させる「防衛部落」とした。通化省では、454「集団部落」のうち379部落が「防衛部落」に組み込まれた。また楊靖宇らの食糧、衣服などを断つため、遊撃区民の食糧を強制徴集し、三日分の配給制を実施、これに違反して食糧支援を行った者は見せしめのため晒し首にした。警察署、分署を増設し日本人警官を配置し、警備道路、警備電線を整備した。

楊靖宇は、10月1日から同5日にかけて中共南満省委と第一路軍主要指導者会議を開催し、第一路軍部隊を小隊に分け分散活動を取ることにした。楊靖宇自らは第一方面軍分隊と直属警衛旅を率い樺甸、濛江、金川を転戦し、1939年末から1940年初めにかけて金川県境から濛江に入った。日本軍は楊靖宇の動向を察知し、通化省警務庁岸谷隆一郎を濛江に駐留させ、大原、有馬、渡辺、小浜各部隊を集め、歩兵第三団、9警察隊、森林警察隊を動員して包圍作戦を実行した。1月6日楊靖宇、韓仁和は青江崗北方の西崗地区で小浜部隊、程斌挺身隊、崔胃峰挺身隊と遭遇し激戦となった。楊靖宇は部隊を分散し、韓仁和部隊は北上して樺甸に向かい、楊靖宇は警衛旅60人を率い東に向かい、第一方面軍政治部主任伊俊山軍との合流を図ったが、阻まれて成功しなかった。2月下旬まで50余日楊靖宇は濛江、輝南の山林地帯を転戦し、この間30余回の激戦を行った。しかし警衛旅第一団參謀丁守竜は1月下旬捕らえられ、楊靖宇の行動計画を白状した。2月2日楊靖宇の周囲には27人がいたが、同10日12人、同15日6人となり、

同日濛江県五斤頂子西北で発見され、程斌、崔青峰、唐振東挺身隊600余人の追撃を受けた。楊靖宇は、負傷した警衛旅隊員を逃れさすため黄生発ら4名に戦列から離脱させ、自らは追撃を振り切り、同18日2名の隊員とともに濛江県城東南大東溝にまで前進した。しかし2名の隊員は食糧調達中に戦死し、楊靖宇は同23日濛江県保安村三道崴子に逃れ、村民趙廷喜ら四人に出会い食糧の調達を交渉した。彼らは村に食糧を取りに戻る途中、日本の特務李正新と出会い、楊靖宇について白状した。最後の楊靖宇と日本軍、挺身隊との交戦については、次の「楊靖宇討伐座談会」において触れる。結局、楊靖宇は同日午後3時頃戦死を遂げた。享年35才であった。

## VI 「楊靖宇討伐座談会」

雑誌『協和』（263期）に「楊靖宇討伐座談会—共産匪の大頭目が日満軍警の手に殞れるまで—」の記事が掲載されている。<sup>14)</sup> 以下、この座談会の内容を抜粋して紹介する。なおこの「座談会」は、「楊討伐を中心として立派な日満親善の実績」を謳い、満州帝国の国威発揚を意図したものであり、楊靖宇については「共産匪の大頭目」などと記しているように、その口調は一方的な主観に基づくものであるが、ここに紹介するに当たっては原文のまま採録することを断っておく。<sup>15)</sup>

この座談会の担当は「本誌側宮本記者」であり、座談会開催に至った経緯について「はしがき」は次のように述べる。

過去数年来満州国治安攪乱の癥といはれ治安部大臣がその首に一万円の賞金をかけてゐた匪賊の大頭目楊靖宇が、わが日満討伐隊のために射殺された。この快報に接した記者は晝夜兼行で現地へ急行。討伐の殊勲者益子警尉補を通化省通化の自宅に訪問した。二人が対談を始めて十分と経たぬ頃警務庁から一人の急使がかけつけて『昨夜、柳河県三源補附近に楊の部下と覚しき敗残匪賊数名現はれた。隊員一同急遽現地向かふから直ちに出勤せられたし』と息をきらしていふのである。ここにおいて記者と益子氏の折角の対談はお流れになるかと思はれたがまた本部より電話あり、『「協和」から見えられた記者の人も一緒に現地へ来られては如何？ 現地にてお話ししたきこと数多ある』と云ってよこされたのは、警務庁長岸谷隆一郎氏であった。記者は欣喜雀躍、討伐隊のトラックに便乗、長駆して三源補にかけつけた。かくてこの日の夕刻から討伐隊の警戒物々しき三源補部落の真ん中、討伐隊本部に当てられた警察署の一室において、初めて予期さへしてゐなかつた座談会が、予期さへしてゐなかつた珍しき人々の出席を得てゆくりなくも開かれることになったのである。」

座談会出席者は次の顔触れであった。通化省警務庁長・警察隊本部長岸谷隆一郎（「もと満鉄社員」）、同警務庁警尉補益子理雄（「大綱警尉と共に楊討伐に最も輝かしき功績あり、楊に二十米まで肉迫し、彼と最後の決戦をなせし人」）、同警務庁警佐・通化省柳河県副県長緒方忠雄（「帰順匪の教育に当たりて功績著しき人」）、程斌大隊長（「もと楊靖宇の部下にしてその参謀として活躍しが、二年前帰順し、現在は討伐隊の大隊長たり」）、王・申大隊長（「この兩名もと楊の部下、現在帰順して討伐隊大隊長」）、「その他の人々・胡（工作班長）、李（録）、尹（参謀）」（「この三名もと楊の部下なりき」）。

### 《楊靖宇の人物像について》

「記者：先ず楊といふ男の履歴とか風貌とかいったものについて・・・」「程：今年四十歳でした。山東省の生れです。丈は見上げる程高く六尺近いでせう。もちろん力はつよいし、走るのも疾い。」「益子：武力ばかりでなく学識もありました。大学を出てゐて曾て二千人の部

下から敬服されるだけのものを十分持つてゐました。」「岸谷：何しろ肩書だけでも東北抗日聯軍総司令、中日共産党第一路軍第一方面軍参謀といふ。」

「記者：その全盛期といふのは何時頃でしたか？」「益子：康德二年頃から売り出しましたね。当時楊は中国共産党派遣員として哈爾濱にゐて、吉林の盤石県にある鮮系の共産黨員と組んで公共団体を組織してゐたんですが、その頃その団体は非常に不統一なものでこれを統制するだけの腕のある者がゐなかつた。」「記者：で、楊はその機に乗じて党首の席に坐つたといふわけですね。」「益子：さうです。あの武力と学識は忽ち衆望をあつめてしまつた。そして彼を中心として一つの大きな団体が結成され、当然それは赤化され、やがては匪賊化されたのです。彼の全盛時代は何といつても康德三四年頃で、二千人以上の部下を持ち、身辺は絶えず二、三十挺の機関銃で護り、医療機関まで備へてゐたといふから大したものですよ。彼は間島・安東・通化・吉林・奉天の五省三十県を跨にかけてゐたのです。」

#### 「楊靖宇を追撃した警務隊の「ダニ戦法」について」

「益子：私からお話しませう。それは言葉どほりダニのやうにくつついて離れぬ戦術ですよ。一度くひ下がつたが最後、どこまでもくつついて少しも追撃の手を弛めない。この戦法は庁長閣下が長年の匪賊討伐から得られた尊い経験による戦法で、こんど楊がへたばつたのもこのダニ戦法にひつかつたからです。そのダニといふのは即ち我々ですがね。」「益子：とに角我々は楊の尻にダニの如くくつつきました。それは、楊の全盛時代からさうでしたが、ほんとうに命がけでくつつき始めたのは、今年の一月上旬からでした。その頃すでに楊の勢力は以前の見るかげはなくわずかに手勢二百となつてゐましたが、わが日本軍守備隊、鉄道警護隊、警察隊に連続追撃せられて山岳地帯を右往左往して敗残の一路を辿つてゐたのです。」「緒方：その二百名ばかりの匪賊に対して、殆ど致命的な打撃を与へたのはわが〇〇飛行隊の出動でしたね。」「岸谷：あの時の飛行士の人は全く勇敢だったねえ！殆んど木にすれすれに飛んで地上掃射をやる、爆弾投下をやる・・・かと思ふと、味方の上に飛んで来て味方の誘導をやる。」

#### 「足跡会議」について」

「岸谷：とに角匪賊といふ奴は一度追撃始めたら決してその手を弛めてはだめだ、ゆるめるとまた勢力もりかへすから、折角の苦心がムダになる。だから我々は最後の一人まで、徹底的に追ひつめる・・・、ダニのやうにくつついて相手に安眠の暇すら与へない・・・これで大抵の奴は参つてしまふが、今度の楊討伐も実にそのダニ戦法の典型といつてもよい位だ。今もいったやうに今年の一月上旬頃まで二百名の集団をなしてゐた匪賊は日本軍守備隊の指導による鉄道警護隊、われら警察隊、それに通化駅勤務員諸氏の一条乱れぬ連絡によって連日連夜猛撃せられて死傷者、逃走者が続出し、つひに楊以下十六名となり、十日頃には十二名、更に二十日過ぎにはわずかに八名となつた・・・。しかし我々はしつこく食ひ下がつた、そして二月十五日には楊以下三名――、十八日にはたうたう部下の二名を殺し、楊一人にしてしまつた。楊はさんざんにもがいた、苦しんだ、自分の身体から追撃の手をふり放さうとして焦りに焦つたがどっこいこのダニは執念深い、たうたう二十三日には流石の大頭目も往生してしまつたといふわけだよ・・・と、一口にかういつてしまへば何でもないうだが、遂に楊を最後の一人にするまでの苦勞は筆や言葉では尽くせないよ。」「記者：色々と血の滲むやうな苦闘をなさつたでせうが、その中で一番苦勞をなさつた話をつつ・・・」「程：何といつても一番ひどかつたのは二月二十五日の追撃でした。」「益子：その日、崔君の部隊は楊の行方を捜査してゐるうち、ひょいと雪の上に足跡を発見したんです。足跡だ！といふと一同は俄然緊張します。それまで

十何満里歩ゐてゐた疲れも何も一時に消えてしまふ……」「緒方：捜査者にとって足跡は一つの希望ですよ、足跡を発見するとそれを取巻いて足跡会議といふのが始まるんです。」「岸谷：雪の上についてゐる足跡の数や幅や、向き具合で敵の大体の数、行った方向が判るんだが、この頃は匪賊の方でも考へて、何人歩いても一人が歩いたやうににしか足跡を残さない、つまり後から歩く奴は皆一番先の奴の足跡から一分も出ないやうにして歩くんだよ。しかしそんな場合はこちらでも足跡の権威者がゐて、ふみつけた雪の堅さ、踏み込んだ深さ、などによってその数を知るんだ……」

#### 《楊靖宇の発見と交戦について》

「古高：ゐたんですか果たして?」「ゐましたよ、全く恐ろしい直感です、しかも我々が夢の間も忘れ得ぬ楊だったのです!」「程：楊匪は崔君の一隊を見ると驚いて逃げました……一同はソレ楊がゐるとばかり追ひかけました。」「岸谷：ところが、外の者は勿論あの犬男の崔君でさへどうしても追いつけないんだよ。楊はもうその頃部下と三人きりになり、二人の部下は村へ食糧探しに出して何日か経った後で、腹の中はずっと前から空っぽであった筈だが、その逃げ足の速いことったら君、両手を頭の上まで振りながら大股で駆けてゆく有様は、まるで駝鳥がかけるやうでした。しかし、遂にある山の頂まで追ひ上げた、楊は地物を利用して盛んに発砲して来たので、こちらも伏せをして応戦した。その時隊付の伊藤警尉補が、三百米ばかり前方にある楊に向かって『帰順しろッ!』と大声で叫ぶと向ふから『帰順するから発砲を止めてくれ』と叫んだ。つづいて『帰順する前に話があるから、君一人で来てくれないか……』といふのです。『よし、今行くぞ!』と叫んで、伊藤警尉補が立ち上った瞬間、ダダダと来た。『あっ』と叫んだ伊藤君はバツクリ前にのめった。つづけざまに三発、しかも胸部に命中したんだ。」「益子：モーゼルー号式拳銃も拳銃ですが、射手が恐るべき楊だったのです。あいつは二百米以内なら頭の上の林檎でも射抜く程の名人ですよ。それが直接照準千米は利くといふモーゼルー拳銃を握ったんだからたまらない!」「尹：(片言の日本語で)伊藤さんやられた!崔オコッて楊匪を追った。スルト崔、マタやられマシダ(尹君は誤る崔君)」「岸谷：股を射抜かれたんだ。崔だけでなく、その日楊を追って彼のモーゼルー拳銃のため戦死者一名(この戦死者は伊藤君ではない、伊藤君は不思議に助かったよ)負傷者六名……我々はなるべくなら奴を生かして奴の才分をよい方に更生させようと思つたので帰順をすすめたんだが、もう容赦は出来なくなった……さァ射殺せよ……といふので一齐に射撃を始めた。すると奴はたまらなくなって逃げ出した。逃げて行く奴の左手に味方の一弾が命中した。それでも奴はひるまず逃げるんだ!まるで巨人が駆けるやうだ。そしてたうとうある密林の中で味方を振りまいてしまったんだ。一同雪の上に点々と落ちてゐる楊の血痕をたどって彼の跡を追った……」「緒方：しかしわるいことにそのうち日がくれてしまったんですよ」「申：懐中電灯没有です(と、永間が照つてゐた申隊長)」「益子：だから一同はめいめい持つてゐたマッチをすりすり、暗の中に血痕を探しては進んで行きました。そのうち、寒気が襲つて来た……疲労が襲つて来た……気がついてみると一同は朝出発してから十幾時間なんにも食つてゐないんです。腹の中がキリキリといたむ……」「緒方：雪の中にばたりばたりと倒れる者が出来て来た。楊を見失つて急にがっかりしたためでせう。さなだきにその日の行程は山坂道を十五里以上も駆けてゐるのです。一人がばったり倒れると、宛も猛烈な伝染病でも流行だしたやうにあそこでもここでもバタリバタリと落伍者が出来る。かうして朝出るとき六百名もゐた討伐隊が、やがて三百名、二百名となつて来た。」「岸谷：しかし、それでも我々は追撃の手をゆるめなかった。落伍者の身体を跨ぎ越えつつ進んだ!よし

んば最後の一人とならうとも進むつもりだった。かうして十五日も過ぎ、十六日の午前二時頃になると、いつのまにか隊員はわずか五十名になってゐた。そして残り少なくなったマッスを、寒さのためすっかり感覚を失った手で一本一本とすりながら、無我夢中で楊の血痕と足跡を追った……。逃げ方方もよく逃げたが、追ふ方でも、よくもまゝ追ったものだ！幸ひにして後で食糧を運ぶ味方のトラックに出逢ったから辛うじて助かったんだが……」「記者：で、楊の行方は判りましたか？」「益子：いやその日の捜査はムダでした。しかしもうその時は、我々には一つの確信があったんです、もう楊は一人だ……。しかも傷づいてゐる。飢えてゐる！逃がしはせぬぞ……。といふ……。大きな自信が湧いて來たのです」

#### 《「最後の決戦」について》

「益子：その日から二日過ぎた十八日には濛江江城の東六キロの大東溝部落附近で楊の部下が二名食糧工作に出て來たのを大東溝警防隊と特捜班が出動して射殺しました。愈々楊も完全に一人となったわけです。一方討伐隊では近隣一帯の村民に『山に入る薪取り人夫は絶対に昼食を携行すべからず』と命令を發しました。すると二月二十二日、保安屯西方約五満里の地点において薪取りをしてゐる農民四名に向かつて、白麵二袋と防寒靴を持参せよ、多額の金を与へるぞ、といつて、大きな札束を見せびらかし受取りの場所まで約束した一人の男があるといふ。その農民の報告に討伐隊一同は俄然緊張、活動を開始したのです」「岸谷：しかしその時、討伐隊の殆どが他の地へ捜査に出かけてゐて警察隊本部には万一の場合にと残してあった唐大隊の一ケ中隊があるばかりだ。しかもトラックは全部出払って予備車がたった一台、しかしこの情報をきいて一刻もどつとしてはゐられないんだ。直に各方面に向けて連絡をとると同時に、本部に居合はせた益子君、大網警尉補以下十九名がトラックに便乗して、現場に向かったわけだ……」「益子：命令が下ると私達は直ぐに武装してトラックを走らせたんですが、トラックは半途までしか行けない、止むを得ず、届け出た農民を案内者に立てて約束の場所にかけてつけました。すると早くも我々の來たことを知ったものとみえ約束の場所には影も形もなく、しかしそこから大きな足跡が点々と雪を踏んで、近く of 三百米くらの山へ登つてゐる、そこで我々も足跡を辿つて山に登りました。すると一番先頭にゐた一人が『ゐたぞッ！』と声とてて出さぬが、身ぶりで山の向ふ側に人影のあることを告げたので俄然一同は緊張しました。全員を二班に分けて、一班は山の頂から、他の一班は中腹から忍び寄つてどつと一齊に、山の向ふ側の岩の裂け目にゐる人影に向かつて射撃を始めました。すると人影は転ぶやうにしながら逃走した。私は四五名の監視者を山の上に残して、人影の行く方を見守るやうに命じてあとを追ひました。もう相手は走る力も尽きたとみえ、再び山の麓の地物にかくれて死物狂ひに応戦し始めた、両手に二挺のピストルを持って乱射して來るのです。敵味方の距離は五十米。『いくら抵抗しても同じだぞ！降伏しろッ！』と我々はもう一度帰順を促した。しかし相手は返事の代りに拳銃弾のお返しです。『畜生！やつてしまへッ！』と、更に三十米まで進撃すると、もう相手は進退窮まつてゐるのです。味方は又もそこで二手に分れました。私は満警一名をつれて山上の監視隊の誘導を受けつつ更に二十米まで肉迫しました。そして私の方と別隊とで、猛烈な射撃をあげせかけました。十分間も交戦したでせうか、間もなくどちらから射った弾丸が命中したか判らぬが相手はバツクリと斃れるのを私は目撃しました。そして力の限りに『斃れたぞッ！前進だアッ！』と叫んだのも無我夢中でした。かけつけてみると、身に数弾浴びた巨大な男が地にのけぞつてゐました。かねて見てゐた人相書から『これこそ楊だ！』といふ直感がさつと來たのですが、その予感はまさに的中しました。もと楊の部下だった人々が首実檢の

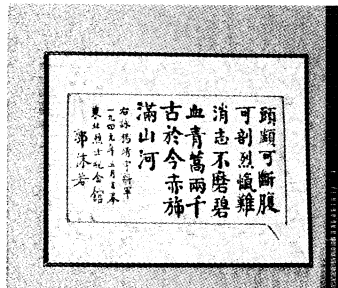
結果、その男こそまがふことなき、最後の一人、大頭目楊靖宇だと判りました。それが判ったとき一同は死体をかこんで暫くはボウとしたままでしたが、次の瞬間いひ合はしたやうに万歳を叫んで、みんなおいおい泣き出してしまひました」「岸谷：嘗って二千名の配下に君臨してゐた楊靖宇の最期にしては、余りに惨めだったよ。彼の死体は六千六百六十円の大金こそ身につけてゐたが、靴は破れ着物は裂け、胃袋の中には一粒の飯さへはいつてゐなかつた。彼は餓えをしのぐためには山で働く村民達に、百円札何枚かをみせて、握飯一個と交換を望んだかも知れない。しかし、その握飯一個さへ与えられなかつたんだ」「緒方：道を誤った英雄ですね！」「益子：たしかに英雄ですがね」(以下略)

この「座談会」は、楊靖宇を追ひ詰め殺害した満州警務隊責任者たちの自慢話であり、これを収録するに当たって冒頭でも断つたやうに、その口調は楊靖宇を「匪賊」として扱うやうに極めて一方的なものである。しかしこの資料は、楊靖宇の最後の闘いを物語るものであり、彼らが自慢気に語る楊靖宇との闘いの様子は、彼らも楊靖宇を「英雄」と認めざるを得なかつたやうに、楊靖宇の指導者としての優秀さ、人となりの崇高さ、その不抜の体力、死を睹して奮戦し最後まで英雄的な闘争を行った不屈の闘志を読み取ることができるのである。その点ではこの「座談会」は、満州国の国威発揚を計画しながら、皮肉なことに逆説的に楊靖宇の偉大さを示すことになった資料として価値を見いだすことができると言えよう。

また「座談会」によると、楊靖宇の「胃袋の中には一粒の飯さへはいつてゐなかつた」と楊靖宇死後、彼が解剖されたことを語っているが、遼寧省檔案館、「九・一八」記念館の展示写真の中に楊靖宇の腹中には飯粒は無く、木の根と綿入れの服を切り裂いて食した痕跡のみが確認されたことの説明や、箱に入った楊靖宇の首の前に整列する日本軍関係者のものがあつた。

尹郁山・鄭光浩著『長白山史話』『抗日民族英雄楊靖宇』<sup>6)</sup> は次のような事実を記している。

「楊靖宇の遺体は、関東軍満州南地区討伐隊長古見政八郎の指示により通化省警察本部に運ばれ腹部が解剖され、張奚若の手により首を切断された。2月24日から三日間、楊靖宇の首は車に乗せられて通化県城内を周回し、遺体は保安屯の郊外に捨てられた。7日後、濛江県警務科長王士洪、警察大隊長桑文海は、連日楊靖宇から『首をかえせ』という悪夢にうなされ、関東軍討伐司令官野副昌徳に『特別命令』により、仮首を着けた楊靖宇遺体の『慰霊祭』を行うよう頼んだ。3月5日通化省警務庁長兼警察本部長岸谷隆一郎は自ら葬儀を行い、墓碑は通化の著名な書道家李成陽に依頼して書いた。しかし楊靖宇の頭蓋骨はどこに行つたのか。長春市解放直前、かねて楊靖宇を尊敬していた同市の劉亜光と周瑋夫妻は、長春医学院の解剖教室の大型標本陳列棚のガラス瓶に入つた楊靖宇の頭蓋骨を発見した。長春市が解放された二日目、陳翰章將軍の頭蓋骨と共に亜光医院に納め、四日後に元松花江軍区前線指揮部責任者李広徳により解放軍駐弁処(現東二條建華醫院)に送られ、更にハルビン烈士記念館に送られた。1949年5月偉大な無産階級活動家郭沫若は、ハルビンの東北烈士記念館において楊、陳二人の將軍の頭蓋骨と対面したとき、『咏楊靖宇將軍』と題した詩を詠んだ。頭顱可断腹可剖／烈懷難消志不磨／碧血青蒿兩千古／於今赤旆滿山河」(「首は切ることができても、腹は裂くことができても、裂帛の気概は消せない、志は不滅である。抗日に命を捧げし楊靖宇の名は、幾千年に伝えられ、今も山河を走る。赤旗はためく」)



郭沫若の詩(楊靖宇烈士陵園)

## おわりに

前掲『長白山史話』は又次のように記す。「1957年秋、靖宇陵園が完成した。靖宇県の各期の代表は、8月20日將軍の遺骨と木製の頭を共に通化市内の靖宇陵園に運んだ。事後、本当の頭蓋骨がハルビン市にあることが分かり安葬委員会は石膏で將軍の鑄型を作り本当の頭蓋骨を受け取った後、再度式典を行うことにした。9月20日黒竜江省とハルビン党政軍民は楊靖宇將軍の頭蓋骨送還儀式を丁重に行った。通化市党政軍民も同時に丁重な受け取り式典を行った。抗日將軍の頭蓋骨は全東北の大地を揺るがし、無数の先烈を思う心を動かし、無数の先烈を慰める情を繋いだ。1958年2月23日楊靖宇將軍の頭蓋骨と遺体は、通化公祭公葬委員會の心のこもった扱いを受けた後、五星紅旗に覆われ丁重に靖宇陵園に葬られた。」

1986年10月15日中華人民共和國國務院により「全國重點烈士紀念建築物保護單位・楊靖宇烈士陵園」が美しく整備され、「民族英雄楊靖宇將軍」の立像が立てられた。2001年9月19日、通化市の楊靖宇烈士陵園を訪れたとき、楊靖宇將軍の像とともに、私は、同園の中の展示室において上記郭沫若の詩を確認することができた。

## 注

本稿の楊靖宇の戦闘に関する事績、東北抗日人民革命軍、東北抗日聯軍等に関する記述は、東北抗日聯軍闘争史編写組「東北抗日聯軍闘争史」（人民出版社 1991. 2）を基本的に使用した。また次の書も参考資料とした。龔古今・唐培吉主編「中国抗日戦争史稿」上下（湖北人民出版社 1983. 11）、東北抗日聯軍史料編写組「東北抗日聯軍史料」上（中共党史資料出版社 編者前言1987. 5）、王輔著「日軍侵華戦争」①（1931-1945）（遼寧人民出版社 1990）、中国人民解放30年徵文編輯委員會編「星火燎原」④（人民文学出版社 1961）

- 1) ここで記した楊靖宇の事績については以下の書を参考にした。(1) 中国人名大詞典編輯委員會「中国人名大詞典・歴史人物卷」上海辞書出版社 1990年2月、(2) 張麟「楊靖宇同志的故事」（「紅旗飄飄」選編 本第一集 中国青年出版社 1979年5月所収）、(3) 曉宏著「楊靖宇—威震敵胆的“抗連”名將—」（中共中央党史研究室科研管理部編「抗日英烈譜」<1931-1945> 中央党史出版社 1995年10月 所収）
- 2) 同教科書の翻訳は森川登美江翻訳「中国の中学校の歴史教科書（上）」（「大分大学経済論集」第53巻第4号 2001. 11）による。
- 3) 以下の記述は「東北抗日聯軍闘争史」編写組『東北抗日聯軍闘争史』（人民出版社 1991年2月）の内容を整理して述べている。以下同書を『闘争史』と略称。
- 4) 常占隊は磐石一隊の反政府抵抗勢力（緑林）で、その隊長は常占と号していた。磐石中心县委の決定により、常占隊は総隊長常占、政委張国振、政治部主任王耿、參謀長全光任とした。前掲『闘争史』pp.84-85
- 5) 総隊長孟杰民、副隊長王兆蘭、政委初向臣、參謀長李紅光。総隊は三つの大隊より成り、第1大隊長李杰民、第2大隊長李万和、第3大隊長劉克文。
- 6) 隊員約20余人、隊長王仁齋、政委劉三春。
- 7) この二つの文献は中国の抗日闘争の展開に対して、特別に東北の抗日遊撃戦争と東北反日民族統一戦線の形成に対して重要な指導作用と歴史的意義を持った。「一・二六指示信」は、日本帝国主義が東北を占領した後、階級関係の変化と民族矛盾の先鋭化している状況に基づいて、党の東北における切

- 迫した戦闘任務、策略方針と目前の中心工作を提出したものである。前掲『闘争史』 pp.123
- 8) 同会議において「東北人民革命軍第一軍独立師成立宣言」「東北人民革命軍政綱」「東北人民革命軍暫行規則」「東北人民革命軍士兵優待条例」「告反日義勇軍戰士弟兄書」が採択発表された。前掲『闘争史』 pp.127
- 9) 第一支隊老常青、第二支隊四海山、第三支隊国軍、第四支隊朱司令、第五支隊双勝、第六支隊保国、第七支隊東辺好、第八支隊趙參謀長、その他南滿遊撃隊、江南遊撃隊を支隊とした。前掲『闘争史』 pp.132
- 10) 大会には各県区、軍代表32人が参加、会期は5日であった。李東光「関于南滿各地的情勢」、韓震「関于人民革命軍独立師整个工作的情形」の報告があった。前掲『闘争史』 pp.175
- 11) 紅旗招展槍刀閃耀我軍向西征／大軍浩蕩人人英雄日匪心胆驚／紀律嚴明到处宣傳群衆俱歡迎／創造新区号召人民為祖国戦争／緊握槍刀向前猛進同志齊踊躍／殲滅日匪今田全隊我軍戰鬥好子／摩天高嶺一場大戰驚碎敵人胆／監甲槍彈繳獲無數齊奏凱歌還。
- 12) 前掲『闘争史』 pp.332-333 この戦闘後、トンネル工事に従事していた朝鮮人労働者250人が聯軍に参加した。
- 13) 前掲『闘争史』 pp.333
- 14) 『協和』は「満鐵社員会」の発行によるものである。「楊靖宇討伐座談会」は『協和』第263期昭和15年4月15日に掲載。
- 15) 採録に当たっては旧字体漢字は現代当用漢字に改めたが、旧仮名遣いについては原文の通りである。またルビは省略した。
- 16) 吉林文史出版社 1988年10月 pp.330~331

The General Yang Jing-yu (楊靖宇),  
The Leader of Kang Ri Lian Jun Di Yi Ru Jun (抗日聯軍第一路軍)

Teruo KANBE

